

心理学の観点から見た知的財産制度の将来

Future of Intellectual Property from the Psychological Viewpoint

奈良先端科学技術大学院大学先端科学技術研究推進センター研究戦略部門長・教授 **久保 浩三**

PROFILE

昭和 62 年弁理士試験合格。大阪府立産業技術総合研究所、(財)大阪府研究開発型企業振興財団、大阪府立特許情報センターを経て、平成 15 年 4 月から奈良先端科学技術大学院大学。
現在、奈良先端科学技術大学院大学先端科学技術研究推進センター研究戦略部門長・教授。産官学連携推進本部副本部長。平成 22 年産業財産権制度関係功労者表彰（特許庁長官表彰）。

✉ kubo@rsc.naist.jp

TEL 0743-72-5601

1 特許情報との関わり

1987 年に弁理士試験に合格して以来、大阪府立産業技術総合研究所、大阪府研究開発型企業振興財団および大阪府立特許情報センターにおいて、特許管理、ベンチャー投資、特許情報管理等いろいろな立場から、中堅、中小企業において製品開発を行う人に特許活用に関するサポートを行ってきた。特許と地域振興が疎遠であった時代から長年、知的財産活用による地域振興を考えてきた。2003 年からは奈良先端科学技術大学院大学に移り、知的財産に関する研究、教育および大学技術移転に従事している。

その間、特許検索競技大会を発案し、いろいろな方のご協力を得て、実現にこぎつけた。¹ また特許情報普及功労者表彰についても発案し、いろいろな方の協力の下、日本特許情報機構の事業として運営を行っていただいている。² 現在、選考委員会の委員長を拝命しているが、日本特許情報機構の惜しみない協力には心から感謝をしている。このような活動に対して、2010 年に産業財産権制度関係功労者表彰（特許庁長官表彰）を受賞したことは望外の喜びであり、関係者に心より感謝申し上げたい。

2 現在の知的財産制度への疑問

以上のように特許情報を含めた知的財産制度に長年接する中で、近年、いろいろと疑問に思うことが多くなってきた。

特許制度の意義は、次代と共に変遷する。特許の起源とされるヴェネチア共和国での制度は、新しい技術に習熟した職人を国外から招くため新たな技術を実際に使用するための特典として、既存のギルドの枠外として許容するためのものであった。³ また、1623 年制定の英国専売条例においては、外国の優れた技術を導入するための誘因としての独占を付与するものであって、6 条にいう発明者には最初に連合王国内に発明を輸入した者も含まれ、この規定は、1977 年法への改正まで残っていた。⁴

現在、特許制度は発明の保護および利用を図ることにより発明を奨励しもって産業の発達に寄与することを目的としている（特許法第 1 条）が、現在の知的財産を巡る状況は法律の趣旨に合致しているだろうか。ここで有名なアップルとサムソンの知財訴訟について考えたい。両者は現在世界 10 か国で 50 件以上の特許訴訟を抱え、数千億円以上の賠償を求めている。関係者の間で

1 特許検索競技大会開催報告、桐山勉、情報の科学と技術 57 巻 10 号、pp493-499

2 Japio YEAR BOOK2012 pp18-28

3 知的財産の歴史と現代、石井正、発明協会、p40

4 先使用要件の根拠論に関する比較法研究（英米法を中心に）、武生昌士、特許庁委託平成 22 年度産業財産権推進事業、http://www.iip.or.jp/summary/pdf/detail11j/23_19.pdf#search=先使用要件の根拠論に関する比較法研究

は訴訟を続ける合理的な理由はないとされ、⁵ もはや知的財産制度の本質を見誤っているようにも思える。

また研究者も発明・創作の奨励について競争的環境が行き過ぎ、生活に破たんをきたしているという報告もされている。⁶ 過度の競争も研究の本質を忘れたものとなっている感がある。

グローバルな経済環境の下で、企業も研究者も過大な競争を続けるしかないのであろうか。このような状況を打開する方法はないのであろうか。本稿は、今までの方向性による考え方へのアンチテーゼである。しかし、必ずしも解決策を提示するものではないことを最初にお断りしておく。

3 心理学の観点

現在の特許法の目的が産業の発達にあることは述べたが、さらにその先にあるものは生活の向上であり、各人の幸福であることは論を待たない。各人が幸せに感じるためには、各人の心理に立ち入る必要がある。

ここで、心理学とは、行動と心的過程についての科学的学問と定義することができ、古くは古代ギリシャ時代のソクラテス、プラトン、アリストテレスまで遡ることができるが、科学的心理学としては19世紀末のウィルヘルム・ヴントがライプチヒ大学に心理学実験室を設置したときであるとされる。

その後、ウィリアム・ジェームズが機能主義として知られるアプローチを作り出し、ジョン・B・ワトソンが行動主義の創始者となり、ジークムント・フロイトは精神分析の理論と方法論を考え出した。⁷

さらにその領域は、現在は非常に広範に広がり、心理学の主要領域として生物心理学、認知心理学、発達心理学、社会心理学、人格心理学、臨床心理学、カウンセリ

ング心理学、学校心理学、教育心理学、組織心理学、工学心理学等があるが、さらに進化心理学、文化心理学、ポジティブ心理学、⁸ また犯罪心理学、産業心理学、交通心理学等あらゆる分野に及んでいる。⁹ 政治心理学¹⁰ や消費者心理学や環境心理学もあり、¹¹ この段からすると、知的財産心理学・発明心理学があっても奇異ではないように思われる。

4 心理学と知的財産の関わり

本稿の目的は、心理学的観点から知的財産制度を見直すことにあるが、その前にどのような心理学の観点があるかについて検討をしてみる。

現代の心理学的枠組みにおいては、いろいろな切り口からの分析があり、例えば、生物学的枠組み（行動と心的過程の基礎となる神経生物学的過程の理解）、行動学的枠組み（条件づけと強化による観察可能な行動の理解）、認知的枠組み（知覚、記憶、推論、決定、問題解決などの心的過程とそれらの行動との関係についての理解）、精神分析的枠組み（性や攻撃衝動による無意識の動機による行動の理解）、主観主義的枠組み（自発的に構成された主観的現実による行動と心的過程の理解）からの検討があり、¹² また、個体発生的研究、系統発生的研究、動物研究、臨床的・病理学的研究、行動研究等からの分析もあるが、¹³ ここでは、筆者の浅学のため前述した心理学の分野である一般心理学、認知心理学、臨床心理学、産業心理学、発達心理学、教育心理学、人格心理学、社会心理学等の観点から検討を行う。

4.1 創作と心理学

一般心理学、認知心理学、臨床心理学の観点から検討を行う。例えば、次のような課題が検討される。

5 日経新聞2014年4月8日

6 The impact of funding deadlines on personal workloads, stress and family relationships: a qualitative study of Australian researchers, Danielle L Herbert, et al., <http://bmjopen.bmj.com/content/4/3/e004462.full>

7 ヒルガードの心理学第15版、内田一成監訳、金剛出版、pp7-15

8 左記7、p22

9 心理学第4版、鹿取廣人他、東京大学出版、p19

10 政治心理学、オフェル・フェルドマン、ミネルヴァ書房

11 Teach yourself Psychology, Nicky Hayes, The McGraw-Hill Companies

12 左記7、pp15-21

13 上記9、pp4-18



- ・発明を行う順序を要素毎に分け、それぞれについて心理学からの見地から、力をいれるべきところ、避けるべきところを明らかにしていく。
- ・どのような心理状態で発明は生まれるか？ 発明を生み出すためにはストレスをかけた方がよいのか、それともリラックスした方がよいのか？
- ・課題の創出と課題の解決では脳はどのように変わるのか？ サイエンスフィクションのアイデアと発明の創出とは脳の動きは異なるのか？
- ・発明の創出と発明の事業化とは異なる脳の使い方が？
- ・どのような心理で発明がなされたかを分析する。また、結果としての発明から発明がなされた心理状態を推測することはできるのか？
- ・クリエイターのためのよりよい臨床心理とは何か。知能指数 (IQ: Intelligence Quotient) を重視すべきなのか、心の知能指数 (EQ: Emotional Intelligence Quotient) を重視すべきなのか、また、それらのバランスを取るべきなのか？

4.2 発明拡張と心理学

臨床心理学の観点から検討を行う。例えば、次のような課題が検討される。

- ・発明者にどのようなヒアリングをすれば、発明をより拡張し、より広い権利を確保することができるのか？

4.3 創作者コンシャスネス

産業心理学の観点から検討を行う。例えば、次のような課題が検討される。

- ・労働環境を豊かにするために、知的財産をどのように活用していくのか。
- ・本来、特許制度は技術進歩のためのモチベーションを鼓舞するものである。サムソンとアップルの戦いが本当に有効か？ 人類が幸せになるための知的財産とは何か？
- ・競争が行き着くところが幸福か？ 究極の目的とは何かを心理学から解き明かす。

4.4 発明者教育と心理学

発達心理学、教育心理学の観点から検討を行う。例えば、次のような課題が検討される。

- ・発明は人格形成にどのように役立つか？
- ・なぜ変化を好む人とそうでない人がいるのか？
- ・天才は教育で作ることができるのか？
- ・日本の若者の内向き志向（外国嫌い、ベンチャー嫌い）は何が問題なのか？ そもそもそれは本当に問題なのか？
- ・集団で発明をどのように活用できるか？

4.5 創作と健康

- 一般心理学、人格心理学、社会心理学の観点から検討を行う。例えば、次のような課題が検討される。
- ・人生を豊かにするために知的財産をどのように活用していくべきか？
- ・発明は認知症防止に役立つか？
- ・発明・創作と健康の関係はどのようなものか？

5 将来に向けて

筆者の所属する奈良先端科学技術大学院大学では、次代の社会を創造する研究成果を創出するという研究目標の下、ヒトに優しい生活・社会環境の実現を目指す「ヒューマノフィリック科学技術」研究を行っている。脳・神経活動の理解に基づき、地球に優しい素材を最大限活用した人の生活支援システムの開発を目指した挑戦的な研究を推進しているが、ここで、ヒューマノフィリックとは、人 (human) と“友好”を意味する接尾語 philic を組み合わせた奈良先端科学技術大学院大学の造語で、人と親和性の高い、人に優しい技術という意味で使っている。ここでは、脳・神経研究が活発に行われている。

現在、脳・神経研究は非常に盛んであるが、¹⁴ 特に文部科学省が公募を行ったセンター・オブ・イノベーション (COI) プログラムでは、脳や感性に係るものとして、弘前大学を中心とした脳科学研究とビッグデータ解析の融合による画期的な疾患予兆発見の仕組み構築と予防法の開発、広島大学を中心とした精神的価値が成長する感性イノベーション拠点、大阪大学を中心とした人間力活

14 脳科学がビジネスを変える、萩原一平、日本経済新聞出版社

性化によるスーパー日本人の育成と産業競争力増進／豊かな社会の構築、慶応義塾大学を中心とした感性に基づく個別化循環型社会の創造の研究等が行われている。¹⁵

このように脳、感性の研究が進むと、今まで分析ができなかった前述した課題についても、具体的な解決を図ることができるであろうことを予想している。

個人的には、心理学の専門家との共同で、大学における研究者の創造活動とストレスの関係についての研究の準備を行っている。大学における研究環境の厳しさ、研究者へのストレスは増大する一方だが、そのストレスが創造活動に有効に働いているか、有効に働いていない場合はどのような対応が考えられるかについての研究である。

なお、前述した課題のいくつかについては、既に産業衛生、産業ストレス、産業能率の観点から研究が行われている。また、心理学の観点からも既に研究が行われている分野もある。ただ、上記の課題は例示であって、本稿は知的財産そのものについて心理学の観点から検討を加えることについての提案であって、さらなる課題が生まれることを期待している。

今後、知的財産の専門家と心理学の専門家が共同で融合研究を行えば、知的財産の分野でさらなる発展が図れるのではないかと考え、本稿による提案を行った。いろいろな方のご意見をお聞かせ願えれば幸いである。

15 センター・オブ・イノベーション (COI) プログラム事業パンフレット、独立行政法人科学技術振興機構、<http://www.jst.go.jp/coi/etc/brochure.pdf>